山本二三丸著

資本論解説

I

現代的意義と読み方

青木書店

山本二三丸（やまもとふみまる）

1913年　愛知県豊橋市に生まれる
1936年　東京大学経済学部卒業
現　在　愛知大学教授，立教大学名誉教授，経済学博士
主　著　『再生産論研究』（1956年，日本評論社）
『労働賃銀』（1960年，青木書店）
『現代資本主義の経済法則』（1962年，青木書店）
『増補・恐慌論研究』（1965年，青木書店）
『構造改革論批判』（1966年，青木書店）
『経済学概論』（1972年，青木書店）

資本論解説　I　現代的意義と読み方

1979年4月20日第1版第1刷印刷
1979年5月1日第1版第1刷発行

¥1800.

著　者　山本二三丸
発行者　山根　襄

発行所　株式会社　青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 8-36582番
電話・東京（292）0481（代表）
郵便番号 101

(分)3033(製)4471(出)0015　精興社・黒岩大光堂製本

© Fumimaru Yamamoto, 1979

まえがき

本書は、マルクス『資本論』についてのわたくしの解説の最初の第一巻を成すものである。

『資本論』の内容そのものについて解説をおこなうのにさきだって、なぜ、『資本論』全体についてこのような解説を書かなければならなかったのか？　それは、よく「樹を見て森を見ない」と言われるように、『資本論』がどういうものであるかという、全体についての正しい観念をまずとらえることを心がけず、粗雑な先入観をもってその細部をあれこれつつきまわすだけで、どこそこがまちがっているとか、欠陥があるとか書きたてて、人を惑わす論をふりまく「専門家」があまりにも多いからである。

『資本論』は、天才マルクスが二十余年にわたって、エンゲルスの協力のもとに、まさに心血をそそぎ刻苦精励してつくりあげた世紀的な著作である。それは、公刊されるやたちまち、資本主義世界の労働者階級にとってもっとも貴重な精神的糧となりもっとも強力な理論的武器となった。それは、レーニンによって正しく継承され発展させられて、世界革命の道を照らす不滅の炬火となり、ロシアにおける社会主義革命の勝利をもたらし、また毛沢東によって正しく中国に適用・発展させられて、数億の勤労人民の解放をもたらした。そして、それは今日では、帝国主義国におけると、社会主義国におけると、そしてまた帝国主義のくびきのもとにある開発途上国におけるとを問わず、いっさいの勤労人民大衆をゆりうごかし、共産主義世界への大道を指し示すものとなっている。

『資本論』が今日でもこのような生きた、巨大な意義をもつものであるからこそ、ほとんどすべての進歩的な人々が『資本論』を学ぼうと志すのであり、また、すべてのえせ「マルクス経済学者」やえせ「マルクス主義党」は、ことさら『資本論』を引きあいにだし、これをあれこれひねくりまわし、骨ぬきにしないではおれないのである。

こうしたさまざまな曲解、歪曲、そして変造の術中におちいらないためにも、そしてなによりもまず、粗雑な既成の観念や誤った考え方を一掃して、正しく『資本論』の内容を著者マルクスに即して理解するためにも、『資本論』全体について、あらかじめ必要な知識を身につけておくことがきわめて大切だと、わたくしは考えたのである。

そのために、目次に示されているように、わたくしは、まずマルクス主義のなかで『資本論』がどのような意義をもつものであるかということの説明をし、つぎに、マルクスの生涯における理論的ならびに実践的諸活動全体のなかで『資本論』がどういう位置を占めるものかということを明らかにすることにつとめた。年代順にその主要な労作と活動をあげ、とくに関連させて考えることが必要とおもわれる重要な労作について、肝要な個所を抜粋してかかげることにしたが、それは、これらの労作を『資本論』との関連でよりよく理解するための便宜も考慮してのことである。第三章では、『資本論』をつくりあげるさいの土台となっている基礎理論を簡単に説明したが、著者マルクスの基本的な考え方がろくにわからないで、この大著にとりかかっても、およそ徒労に終わるしかないからである。ところが、「自分は弁証法はよく知らないし、学んだこともない」と公言しながら、もっぱら『資本論』をねたにしてマルクスにケチをつけた論文・著書を書きまくり、『資本論入門』といった本まで売り出すという、インチキ商人はだしの自称

「マルクス経済学者」もまかりとおっているのが現状である。

つづいて第四章では、『資本論』においてマルクスが研究の課題としているのはなにか、そしてまたその課題を論究するさいにかれが採った方法はどういうものか、ということを明らかにしたが、その第二節で、マルクスの「経済学批判への『序説』」のうちの「3　経済学の方法」をとりあげ、その内容を詳細に説明することをこころみた。これについてはまた、実にさまざまな解釈がおこなわれ、『資本論』の内容をねじまげる議論のひとつの材料ともなっているのである。ついで、第五章で『資本論』全三巻の組み立てを、第六章でその現代的意義を、できるだけ広く、深くとらえることにつとめた。『資本論』がもっとも強力な理論的武器としてこれまで果たしてき、また現在果たしつつある世界史的役割を十分的確に把握することは今日最大の急務であると考えて、わたくしはとくにこの第六章に――第二章とならんで――大きな力点をおいたものである。最後の第七章は、ふつうの意味での「読み方」に当たるものであるが、しかし、そこでわたくしが説明しているのは、やはりふつうの読み方がふくんでいる根本的欠陥を指摘して、マルクスに即した読み方はどうあるべきか、ということなのである。

なお、本書につづいて公刊される予定の第一巻の解説においては、すでに本書で必要な予備的説明があたえられているので、もっぱらマルクスの叙述そのものの字句に即して、できるかぎり詳細かつ厳密な解説をおこなうことにしたい。マルクスがその「第一版への序言」のなかで強調している「顕微解剖学的穿さく」をまず体得することによって、『資本論』の真髄の把握は、より容易に、より確実なものになるものと期待されるのである。

『資本論』の完璧な理解にはまだまだ程遠いわたくしではあるが、これまでマルクス・レーニンの教示

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にしたがって長年のあいだマルクス経済学の把握につとめてきたひとりとして、ここまでは確かだと考えるところを提供して、正しい方向への『資本論』の研究と把握とを推進することが、その責務であると考えたのである。このつたない労作が、幸いにも、その責務をはたす一助ともなり、変革＝建設の担い手たらんとする人々が『資本論』を強力な理論的武器として身につけ、これを正しく適用して明日への道をきりひらいていくうえでいささかなりとも役に立つことができるならば、わたくしにとってこれにまさるよろこびはない。

正確な『資本論』解説を著わすことをかねてからつよくすすめてくれたのは、畏友山家豊君であった。また、本書の公刊については、青木書店の山根襄社長ならびに編集長江口十四一氏のひとかたならぬ配慮にあずかった。あわせてこれらのかたがたに厚く感謝申しあげる次第である。

一九七八年一二月二三日

著　者

目　次

まえがき……i
第一章　マルクス主義における『資本論』……3
第二章　マルクスにおける『資本論』の位置……10
第三章　『資本論』の土台＝基礎理論……93
第四章　『資本論』の課題と方法……118
　第一節　課題と方法……119
　第二節　「経済学の方法」について……157
　第三節　「経済学批判」の意義……189
　第四節　三つの「長所」……197
第五章　『資本論』の構成……206
第六章　『資本論』の現代的意義……221

第一節　理論的武器としての『資本論』……222
第二節　『資本論』の継続＝発展としての『資本主義の最高の段階としての帝国主義』……234
第三節　社会主義建設の理論的武器としての『資本論』……241
第七章　『資本論』の読み方……245
あとがき……270

資本論解説

I 現代的意義と読み方

第一章　マルクス主義における『資本論』

『資本論』を読むにあたってなによりもまずしっかりと頭のなかにいれておかなければならないのは、マルクス主義と『資本論』とのあいだの関連、いいかえれば、マルクス主義のなかで『資本論』が占めている決定的な意義である。

ところで、いったい、マルクス主義とはなにか？――これが問題である。これにたいしては、たとえば、それは唯物弁証法であるとか、いや、史的唯物論であるとか、あるいは階級闘争の理論と実践であるとか、答えるものも少なくない。だが、これらのものは、いずれもマルクス主義と密接な関連をもったものであり、むしろマルクス主義を構成する要素となっているものであることはまちがいないところだが、しかしマルクス主義全体をとらえたものとはいいがたい。さしあたっては、マルクス主義とは「マルクスの諸見解と諸学説の体系」であるということで、一応の説明はつくであろうが、これはまたあまりに一般的な言い方で、『資本論』とのかかわりはここにあるのだということをつきとめることはむつかしい。では、「マルクスの諸見解と諸学説の体系」のなかでもっとも主要な真髄をなすものは、いったい、なんであろうか？　われわれは、方面をかえて、たとえばエンゲルスの有名な小冊子『空想から科学への社会主義の発展』を手がかりにして、「マルクス主義とは、科学的社会主義のことである」という答えをひきだすこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ができる。これは、きわめて正しい考え方である。しかし、「科学的社会主義」という言葉におきかえただけでは、意味をなさない。「科学的社会主義とは、どういうものか？」ということを掘り下げて、その内容を正確に表現しなければならない。それでなければ、往々にしてマルクス主義の精髄を骨抜きにするためにことさら「マルクス主義」という名称を避けてただ「科学的社会主義」という名前だけをつかってごまかそうという、修正主義者の手口は見破れない。「科学的」というのはどういう意味なのか、どこに「空想的」社会主義との本質的なちがいがあるのかということを明確に説明するものでなければ、真のマルクス主義者とはいえない。そこで、科学的社会主義という言葉の意味する内容を念頭において、つぎに簡単に、マルクス主義の定義を考えてみよう。

まず、「マルクスの諸見解と諸学説の体系」のなかで、最大の眼目となっているのは、資本主義社会が社会主義社会へ必然的に変革され移行するという発展法則を明らかにしていることである。資本主義社会がそれ自身に内在する根本的矛盾の激化・成熟によって不可避的にそれ自身を揚棄してより高度の社会主義社会へ移行＝発展せざるをえないという法則、しかも資本主義社会は、それ自身の胎内にこの移行＝発展を必然にする客観的条件としてのきわめて高度に発展した生産諸力と、その移行＝発展を主体的に遂行する歴史的任務を担う賃銀労働者階級とを必然的につくりだすという法則、――これこそ、マルクスがはじめて解明してその「諸見解と諸学説の体系」の基本にすえているものであり、まさにマルクス主義の眼目をなすものということができる。資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行の必然性とその変革＝移行の担い手としてのプロレタリアートの世界史的役割を解明したところに、科学的社会主義の真髄が存するのである。

では、これにたいして『資本論』は、どういうものとしてとらえられなければならないか？　『資本論』は、いったい、なんのために書かれたのか、そして、マルクスがこの著作の最大のねらいとして念頭においていたのはなにか？――これについては、本書のなかでさきにいって詳しい説明がおこなわれることになっているが、しかし、そのまえにここで当面必要な答えを示しておかなければならないと考えられる。その答えは、およそつぎのとおりである。

マルクスの『資本論』は、資本主義社会の経済法則を体系的に解明し、これらの資本主義的経済法則そのものが、いかにして高度の社会的な物質的生産諸力をつくりだし発展させるか、そして同じ経済法則の貫徹によって、いかにして資本主義社会の墓掘人としてのプロレタリアートがつくりだされ訓練され組織されるか、またそれと同時に、それによって社会的生産諸力と資本主義的生産関係とのあいだの根本的矛盾がいかに激化・成熟せしめられるか、ということを詳細かつ明確に示したものである。それは、資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行の法則を、経済諸法則の体系的解明によって、はじめて科学的に論証したものであり、これによって、社会主義をはじめて科学にしたものなのである。

このようにしてみれば、マルクス主義において『資本論』の占める決定的意義は、もはやうたがう余地なく明白である。『資本論』こそは、マルクス主義の基本的要素であり、その主要内容を成すものである。『資本論』に展開されたマルクス経済理論は、科学的社会主義の根幹を成すものであり、科学的社会主義の理論と実践にとっての要(かなめ)をなすものであり、またそのような要を成すものとして、マルクスによってはじめてきずきあげられたものにほかならない。

ところで、科学的社会主義であるマルクス主義は、ただたんに資本主義社会の社会主義社会への変革＝

移行の必然性、その法則を科学的に解明したにすぎないものと言ってよいであろうか？ いや、けっしてそう言うことはできない。社会主義社会への変革＝移行の法則とそこでのプロレタリアートの世界史的役割を解明するということは、当然に、この変革＝移行のための闘争を、革命的階級闘争をいかに主体的に正しくたたかいぬくべきか、いかにしてその世界史的役割を完遂すべきかということの解明をふくまなければならない。そうでなければ、それは、凡百の「社会主義理論」と同じように、机上の空論または観念的な「論理体系」として、とっくの昔に歴史の屑かごのなかに葬り去られてしまったであろう。マルクス主義は、変革＝移行のための科学的な理論と、この理論によって裏付けられこれと緊密に結びついた変革＝移行のための革命的闘争＝実践との二つから成り立っており、この二つのいわば統一として在るというところに、マルクス主義の真髄があるのである。いうまでもなく、理論は実践のためにのみあるものであり、理論によってこそ実践は正しく導かれることができ、また実践によってのみ理論の検証とそのいっそうの発展が保証される。この点からみれば、マルクス主義の真の担い手で、その実践主体となることができ、またそれにならなければならないのは、資本主義社会の唯一の墓掘人、最後まで革命的な唯一の階級であるプロレタリアートであり、なかんずくその先進部隊であり前衛組織であるプロレタリアート党にほかならないということ、その他の階級はこのプロレタリアートの主体的立場に立つかぎりにおいて、ともに世界史的役割を担うことができるということは、うたがう余地がない。したがって、当然、『資本論』についても、これをもってたんに資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行の法則を科学的に論証しているにすぎないものとして、つまり、このような客観的法則をたんに論理的・体系的に解明した学術書にすぎないものとして片づけるようなことは、まったくの誤りであり、きわめて悪質な歪曲としてしりぞけられ

なければならない。『資本論』がほかならぬマルクス主義の基本的要素をなすもの、その主要内容をなすものだということは、とりもなおさず、それがまさしくプロレタリアートの社会主義的変革＝革命的実践のための基本的要素をなすもの、つまり変革のためのもっとも主要な基礎理論でありその理論的武器だということなのである。

このように、『資本論』の真髄がまさしく、それがマルクス主義の基本的要素でありその主要な内容を成すと同時に、社会主義的変革＝革命的実践のための不可欠の基礎理論を成している点にあるのだということは、かたく銘記されなければならない。右の二つの側面が分かちがたく結びつき一体を成しているという核心を見落とすときには、『資本論』は雑多のブルジョア経済学書と同列の抽象的理論を事とする一学術書にすぎないものとみなされ、どの理論書がよりたくみに経済的問題を説明できるかが問題だといった、俗物的見地におちいらざるをえない。こうした「学問的」取扱いが、『資本論』の真髄を無視しこれを骨抜きにしてしまうという意味できわめて悪質なものだということは、多言を要しない。

かつて一八五九年、『資本論』の前著である『経済学批判』がこの世に出たとき、マルクスの盟友、エンゲルスはただちに『書評』の形でこれをひろく紹介し、そのなかで、

「ドイツのプロレタリア党の理論全体は経済学の研究から生まれたのであり、科学的で独立したドイツ経済学もまたこの党の登場の瞬間にはじまるのである。」[1]

と、明確に述べているが、このエンゲルスの的確な指摘は、ただたんに当時の特定の歴史的条件のもとにあったドイツ一国にあてはまるだけではなく、むしろひろく他のすべての資本主義諸国にとって妥当するものというべきである。このエンゲルスの言葉は、マルクス主義およびプロレタリア党にとっての『資本

論』の決定的な意義を、したがってまた『資本論』そのものの真髄をすぐれて端的にとらえたものとして、つねに念頭に刻みこまれていなければならないものである。

（1）ディーツ版、マルクス＝エンゲルス全集、第一三巻、四六九ページ、訳四七二ページ。

ところで、資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行ということは、けっして、ブルジョアジーの支配をくつがえしてプロレタリアートを中心とする勤労人民の支配権力をうちたてるという、狭い意味での政治的革命闘争の遂行ということにつきるものではない。ブルジョアジーの国家権力を打倒してプロレタリアートと人民勢力の国家権力を樹立し、これによって支配階級の反抗を抑圧するというのは、むしろ、社会主義社会への変革＝移行のための第一の前提条件をつくりだすということにすぎない。ブルジョアジーの打倒、その反抗の抑圧からさらにすすんで、社会全体を改造し、新たな社会主義社会をきずきあげるという建設の事業をなしとげることこそが、プロレタリアートと勤労人民にとってもっとも重要な歴史的課題であるが、そこには数えきれないほど多くの、そして並々ならぬ障害と困難がよこたわっており、したがって、きわめて長期にわたる粘りづよい闘争が要求されるし、これらに首尾よくうちかっていかなければならない。この点からみるとき、マルクス主義は、科学的社会主義であるかぎり、たんに、資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行の法則を明らかにするものとしてとどまっていることはできない。それは、すすんで、社会主義社会建設の法則、その基本的路線のあり方を明確にするものとならなければならず、また社会主義社会建設過程を推進するうえでのつねに根本的指針となるものでなければならない。『資本論』第一巻がこの世に現われていらい、およそ一世紀におよぶ世界各国のプロレタリアートおよび勤労人民のたえまない革命闘争の遂行のおかげで、歴史はめざましい進展をとげ、今日では世界は全体と

して資本主義から社会主義への移行の過程にあるといえる重大な局面にたちいたっているのであり、すでに資本主義体制の打倒＝変革を強力的になしとげて着々と社会主義の建設をおしすすめつつある国はしだいにふえつつある。こうした現実の事態の歴史的展開そのものは、マルクス主義理論のよりいっそうの展開を意味するものであり、また他方、それはマルクス主義理論全体をますます内容豊富なものに発展させないではいないのであって、この点からみれば、マルクス主義の主要内容である『資本論』そのもののなかに明示された変革＝移行の法則と社会主義社会の唯一の建設者としてのプロレタリアートの世界史的役割とのよりいっそうの具体化でもあり、またこれをより豊富な内容のものに展開したものこそが、まさしく今日の世界情勢にほかならない、ということができるのである。

要するに、『資本論』は、たんに資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行の必然性と法則を明らかにしているだけではなく、さらに、社会主義社会建設の基本的法則についても明確な照明をあたえ、建設のための革命的闘争における基本的路線のあり方を指し示すものとして、今日ますます重要な意義をもってきている。われわれは、今日までの世界史の発展と世界プロレタリアートと人民勢力の革命的闘争の進展そのものが、ほかでもない『資本論』の豊富きわまりない内容を現実に具体化したものであり、また同時にこれをよりいっそう展開してみせているのだ、ということを的確に把握しなければならないのである。なお、『資本論』の現代的意義については、さきにいって第六章でたちいった考察がおこなわれているので、ここでは、以上述べたように、社会主義建設という新しい歴史的局面での革命的実践にとっても、『資本論』が切実な意義をもつものだ、ということを簡単に指摘するにとどめておこう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com